

59 『馬琴日記』にみる病と宗教

井川道子

佛敎大学大学院博士課程文学研究科

『馬琴日記』は、江戸後期の戯作者曲亭馬琴（一七六七～一八四八）が六十歳のときから二十年あまりにわたって書き残した日記である。

馬琴の生い立ちや家族を調べると、馬琴は若年の時、官医山本宗英の塾に入り、瀧澤宗仙と称して代診をした経験があり、また一人息子宗伯は松前侯の筆頭医師にまでなり、宗伯の妻みちの父と兄も医者という当時としては知識人の一家である。馬琴の文筆活動のほか、訪問者、そしてかれらを中心にした日常生活の隅々まで日記は物語っているが、私情はほとんど述べておらず、淡々と詳しく記されている。日常のありふれたことの中に、病はどのように語られ、いかに対処されたか、宗伯の病を軸に人びとの動きを辿ってみた。

文政十一年四月十日、宗伯、痢病になり同十五日土

岐村玄立に診てもらい、同十七日土岐村元祐に診察を請い葉を貰う。

以後日記の一部を抜粋する。

文政十一年五月十六日 八時比ち、為宗伯眼病・当病平癒、お百、小石川閻魔へ参詣、

同五月廿日 四時過お百出宅、高輪道了に参詣。

宗伯宿願之旨有之によつて也。

岩尾加持講、八半時比帰宅。

同五月廿二日 夕七時過、多紀安淑老来診。（略）。

甚元氣虚弱、尤かるかざる大病の旨、被申之。

同五月廿三日 杉浦老母ち、宗伯病氣平癒の為、薬研堀聖天别当之加持を受候よしにて、神符一包、被差越之。今日の十二支ち、三つめの方へ当り候井戸の水を以、服し候様申來る。

同五月廿九日 今朝、安淑老に薬取遣ス。（略）夕方方歯ことの外いたミ候ニ付、咒いたし遣し、四時過睡眠。（略）昼後、多紀安淑老来診。是迄利水之剂功無之ニ付、烏梅丸料之温剂ニ転方可致旨、被申之、二貼調合、被差置之。人参三分づ、也。厚朴・山椒等も入有、

宗伯いかゞ可有之哉と申候へ共、為試、一貼服用致させ候処、腹熱し、夜中眼中いたミ候よし。全く葉不相応故と存候ニ付、其後、不用之。彼老の療治思之外にて、甘心しがたきことかくの如し。(略) 屋代太郎殿に右之ニ遣ス。

同八月九日 昼前、麻布さがミ殿橋ト笠医師昌寿來ル。宗伯様体申遣ス。(略) 宗伯は不承知のよし候へ共、すすめ候て、試ニ薬用ひ候様申示し、薬所望のよし、やくそくいたし遣ス。

その後宗伯は齒が痛んだり、口の中に出来物ができて痛んだりと煩わしい日が続く。

文政十二年正月六日 昼前、浅野正親來る。予、対面。昨日申遣候処、栗樹大歳符一議也。池埋立候時日、宗伯誕生日の干支と不宜。依之、明七日午後、吉方丙の土をとり、敷ならし可然旨、被談之。

このように息子宗伯の病に対し、家族近隣を巻き込んだので対応であり、その処置は

A 医師にかかり薬をもらう

B 小石川閻魔へ参詣、高輪道了へ参詣、岩尾加持を

受ける、薬研堀聖天別当の加持を受ける、咒いをする、ト笠医師にみてもらう、栗樹大歳符をおこなうである。

AとBは、医案として同じ位置を占め同時進行である。

Aは今の我々と同じ行動であるが、注目したいのはBである。我々が治療として用いるのは不合理と思われるが、治るのなら何でも試してみようという当時の人びとの合理的な考えのあらわれであろう。多種多様の信仰の対象に病との関わりを求めている点はまた当時の庶民の信仰が、いかにバラエティーに富んでいるかみることができ、医療と宗教の交錯が密であることを示している。

このように検証すると『馬琴日記』は医療史、宗教史に重要な史料を提供していると考ええる。